

## 書 評

### 「女傑」奥村五百子について書くとき

守田佳子著 『奥村五百子——明治の女と「お国のため」——』

飯 田 祐 子

本書は、奥村五百子という女性の足跡を丁寧に通ったものである。奥村五百子は、筆者の言葉を借りれば「忘れられた女傑」(5頁)である。戦前には、数種類の評伝が書かれ、劇にも映画にもなった人物であったが、現在ではその名を知る人もほとんどないだろう。筆者が資料として参照している評伝をあげると、大久保高明『奥村五百子詳伝』(1908)、渡邊霞亭『奥村五百子』(1916)、小野賢一郎『奥村五百子』(1934)、吉村茂三郎『高德寺秘話 奥村五百子伝』(1941)、小笠原長生『正伝奥村五百子』(1942)、三井邦太郎『奥村五百子言行録』『奥村五百子』(1939, 1944)、神崎清『奥村五百子』(1944)などがある。論者も奥村五百子について調査したことがあるのだが、これらの他に、手島益雄『奥村五百子言行録』(1908)などもあり、とくに第二次大戦期に集中して、多数の評伝が出ている。奥村五百子とはどのような人物なのか、筆者の説明を借りて簡単に紹介しておこう。「幕末の1845年に生まれ、若い頃から尊王運動に関り、2度目の結婚に破れた43歳からは、選挙運動や郷土唐津の開発事業に尽力した。1897年、53歳で韓国光州の「日本村」建設に着手し、中国へ視察や軍慰問も行った。1901年には(明治34)年には愛国婦人会という軍事救護団体を創設し、1907年63歳で亡くなるまで、「お国のため」に働いた」(5頁)女性である。とくに重要なのは後半の二つの事柄で、韓国へ布教に乗り込んだことと、愛国婦人会を創設したことである。植民地主義と軍国主義を身をもって生

きた人物として、戦意高揚に借り出されるのにたいへん適した女性だったことがわかるだろう。

こうした経歴の人物なので、近年言及される際には、批判的な文脈の中で取り上げられることが多い。朝鮮半島への植民地政策や女性の戦争参加を論ずるなかで、積極的にそれに加担した人物として論じられることとなる。それらに対し、守田佳子氏は次のように言う。「1907(明治42)年に死亡した五百子が、昭和の軍国主義のなかでどのように利用されかたの論評も重要なことであろうが、(略)生存中の五百子をみなおす必要もあるのではないだろうか。五百子の活動を多面的にみていくことで、奥村五百子という一人の女性を忘却のかなたから連れ戻すだけでなく、近代日本の帝国主義・植民地主義・軍国主義を洗いなおすことになるのではないかと考える」(6頁)。守田氏の立場の特徴は、奥村五百子を「忘却のかなたから連れ戻す」ことに注意が払われている点である。後に「利用」された五百子ではなく「生存中の五百子をみなおす」という問題設定が、五百子自身に迫りたいという守田氏の姿勢を端的に示しているだろう。本書は、先に挙げた評伝を含む、五百子について論じられた先行文献を網羅的に参照し、それらを時系列的に組み合わせ直し、五百子におこった出来事を詳細に積み上げていくものである。評伝は複数あるが、後のものが先のもを参照していると思われ、重なるエピソードも多いのだが、もちろん各々独自に加えているエピソードや見解がある。それらを整理しなおし、どの資料に含まれたエピソードなのかを丁寧に注に記しながら、公約数的に圧縮するのではなく網羅的に記述する方法がとられている。五百子を含む日本のナショナリズムを検証し直す立場での議論では、現在のな枠組みに合わせてそれに適したエピソードを抽出することになるが、守田氏のとった方法はそれとは異なり、評価を加えることにたいへん自制的である。評価が極力排されて出来事が記述されていく様は、詳細な年譜が編まれているようですらある。

本書の魅力は、この網羅性そのものにあると思う。おもに二次資料によって記述されているのだが、それぞれの評伝や資料に含まれるエピソードを、一冊

のなかで見渡せるというのは、後続の者にとってたいへん有難い。できるだけ網羅的に取り込むことが目されているので、立場の違う資料の記述を、それぞれの立場とともに知ることができる。たとえば、五百子が朝鮮に実業学校や「日本人村」を作ったことについて、加納実紀代の「韓国民衆との心の交流ができるはずはない」という厳しい批判を引用し、また任展慧が「実業学校への抵抗は民衆が奥村実業学校の侵略性を見抜いていたため」と指摘していることを紹介する一方で（58頁）、五百子と親しかった小笠原長生の記述を引用し、「韓国民衆は新しい文物への理解が足らず、五百子らの真意を誤解したとしている」と紹介している（63頁）。加納や任という戦後の研究の議論と、評伝に示された見解をともに収め、その違いに留まって評価を加えることなく、それぞれを紹介している。

このような姿勢で貫かれた本書は、基本的に編年史的に五百子の足跡を辿っている。序章には、本書を方向づける「要人たちはなぜ五百子を支持したのだろうか」（5頁）という問いがたてられており、その答えに向かって、一生が辿られていく。第一章では、「五百子の家系・結婚生活・唐津での選挙運動と郷土開発」という韓国への布教以前を扱う。第二章では、「兄円心の韓国での布教活動」について述べられている、兄円心は五百子の同志である。兄の布教活動を礎にして、第三章で、兄妹が二人で韓国光州に創設した「日本村」と「その後の五百子の南進視察と北清軍慰問」について述べられる。北清軍慰問は、五百子にとって愛国婦人会の創設を思い立たせる契機となった。第四章では、「愛国婦人会の設立」とその展開が述べられる。明治期の他の婦人会についても広く目配りがされ、当時の文脈が示されている。また五百子の地方遊説について、中央の記録のみならず、地方支部の記録が補足されており、五百子の活動にとって非常に特徴的だと思われる「遊説」の模様を多面的に記述している。第五章は、五百子の「引退と葬儀」を扱っている。引退時には、五百子と愛国婦人会との間に齟齬があった可能性が高いが、それにまつわる切片を丁寧に集め、「尊皇運動からお国のために働いてきたとの自負心のある五百子と、上流

婦人や高等教育を受けた婦人たちとの間に確執があったのかもしれない」(107頁)と推測している。結びでは、五百子の人物像をまとめている。序章でたてられた「なぜ」の答えとして、読むことができるだろう。五百子の一生をふまえて、守田氏は、五百子が「大変なバイタリティーを発揮した特異なリーダーであり、おしとやかな良妻賢母というような女性像にはあてはまらない」(109頁)と指摘する。それゆえ「当時の女性一般の模倣<sup>ママ</sup>とするところではなかった」(110頁)五百子であるが、人々、とくに五百子にときに罵倒さえされた上級の者までもが協力した理由を考察し、五百子の情熱的な「お国のため」の活動に、「誰も正面から反論することができなかつたからではないだろうか」(111頁)とする。また、五百子の階級性について、「「お国のため」には、庶民も上流階級も、男も女もない、と考えていたのではないだろうか。それゆえ、五百子が政府高官らに非礼なまねをしても、高官らは五百子に協力したのではなかろうか」(112頁)とまとめている。「なぜ」の答えは、階級やジェンダーを超えた「お国のため」の情熱ゆえということになるだろうか。

奥村五百子は、たしかに、突出した個性を持った人物だったと思われる。論者も、愛国婦人会について調査をした際、奥村五百子に出会い、そのすさまじいパワーに圧倒された記憶がある(結果として、奥村五百子を中心の軸にして愛国婦人会のあり方について考えることになった。「婆の力ー奥村五百子と愛国婦人会ー」『日露戦争スタディーズ』紀伊国屋書店、2004)。評伝に記された数々のエピソードは、守田氏も引用するように、まるで「馬琴の書いた傾城水滸伝でも読むやう」(小野賢一郎)で率直に言って面白く、歴史の表舞台に関わりを持った人物としての特異さを、たしかに備えた人物といえるだろう。ただ、そのような人物としての魅力と、その行為や残した結果についての今日的な評価は、必ずしも一致しない。奥村五百子の行為と結果は、現在の歴史認識においては批判の対象とならざるを得ない。このジレンマをどのように解決するかが、人物を取り扱った本書にとっては、とりわけ重要な課題となると思われるのだが、この点で、本書に特徴的な、判断を基本的に排した網羅性は、物

足りなさを感じさせる。本書は、概ね二次資料を再構成してまとめられたものとなっているが、参照された二次資料には、はっきりとした質の違いがある。端的に言えば、評伝と戦後の諸研究との違いである。双方を参照しながらの再構成であっても、両者の立場の差異をよりはっきりと指摘し、そのズレや対立を明確に浮かび上がらせるように記述することは、可能だったのではないだろうか。またそのなかで、守田氏自身の立場からの考察に、より多くの紙幅が割かれてもよかったのではないかと思う。守田氏の見解は、たしかにちりばめられているのだが、それぞれの細かい部分について、妥当性を指摘するような形になっており、それらの見解を繋ぐ氏の一貫した立場というものが見えにくい。「お国のため」という生き方自体について、筆者の評価を積極的に加えずに記述することには、やはり物足りなさを感じる。弾劾するのではなく一人の人物が生き抜いた時間を描くということと、事後的な記述であることが避けられないなかで歴史をどのように提示するかということのジレンマは、書き手にとって、軽視すべきではない重要な問題だと思う。本書を読む目的は、奥村五百子についての情報を得ることだけにあるわけではない。守田氏の著作の読み手として、このジレンマをめぐる逡巡や決断を読みたかったと思う。

(太陽書房、2002年、173頁、本体1600円＋税)